



柵の中から組合員に向けてホースで水をかける会社側 (1960-3-29 四ツ山鉱構内)



「灯をともし会」と称する右翼団体も乗り込んで暴力を振るった (1960-3-29 四ツ山売店前)



「灯をともし会」が振り回していたマサカリ (1960-3-30 組合本部で)



椅子を振り上げて暴力をふるう第二組合幹部 (1960-3-29)



「灯をともし会」がこん棒を持ってピケ隊に殴りかかる (1960-3-28 三川鉱裏門)

感銘を受けた三冊の本

内田雅敏 (弁護士)

これまでに感銘を受けた三冊の本を挙げよと問われれば、躊躇なく、井出孫六著『十石峠』(ちくま文庫)、前田哲男著『戦略爆撃の思想』(朝日新聞社)、鎌田慧著『去るも地獄 残るも地獄』(ちくまぶっくす)の三冊を挙げる。十石峠は武州秩父から信州佐久へ抜ける所にある。『十石峠』は秩父事件を描く。「事件」とは権力側からの視点であり、正しくは「秩父困民党蜂起」と呼ぶべきだろう。「秩父が立てば、上州が立つ、上州が立てば、信州が立つ」と民衆の連帯(一点突破、全面展開)を信じ、蜂起し、敗れた農民たちを簡潔な筆致で淡々と描く。

『戦略爆撃の思想』は、日中「戦争」の最中、1938年12月1941年9月まで、抗日首都重慶に対してなされた無差別爆撃について書く。無差別爆撃は軍事施設が目標ではなく、中国人の「抗戦意志」に向けられたものであり、やがてそれは、ブーメランのように日本本土に対する空爆、広島、長崎への原爆投下となり、さらにはベトナムの空爆へとつながると書く。今日のウクライナ、パレスチナのガザに対する空爆もそうである。



『去るも地獄 残るも地獄』は、1200名の指名解雇を契機とする大牟田の三井三池炭鉱解雇撤回闘争について書く。

「英雄なき113日の闘い」と呼ばれ、1960年安保闘争の最中、「総資本」と「総労働」の対決とも言われた。秩父蜂起と同様「三池が立てば、全三井が立つ、全三井が立てば全国の労働者が立つ……。」と闘われ、敗れた。鎌田さんはその墓碑銘を書いたのではない。官営炭鉱の払い下げを受けた三井が、まず四人労働により、次いで、鹿児島県与論島からの移住民の低賃金労働により、資本の原始的蓄積をなし、やがて合理化による首切り、安全性の無視、炭塵爆発事故による多数の労働者の死、一酸化炭素(CO)中毒による苦しみの中で、必死に生きて来た三池炭鉱の労働者及びその家族たちの生きざまを地を這うような聴き取りによって書いたルポルタージュである。鎌田さんは「ノンフィクション作家」という肩書を拒否し、「ルポライター」という肩書にこだわる。本書を電車の中で読んでいて、登場人物たちの生きざまに感銘し、涙を見せないように上を向いて中断したこともしばしばである。

鎌田慧さんの選集の刊行に際し、「月報」への寄稿を求められ、改めて、鎌田さんの『去るも地獄 残るも地獄』を再読した。再読しようと思ったのは、「月報」への寄稿を依頼されたからだけではない。先日偶々、友人のTさんから、三池闘争の最中の1960年3月29日、会社側が動員した暴力団が凶器をかざしてピケを張る組合員たちに襲い掛かる様子を撮った壮絶な20枚の写真を見せられたからでもある。

襲撃によって刺殺された久保清さんの葬儀(4月5日)の写真もある。写真には「久保清さんの遺影を先頭に全国の労働者を守りささえられた三池労組の前進はいかなる困難にも屈せず遠々とつづくのだ(1960・4・5 大牟田市駅前通り)」とキャプションが付されている。Tさんの話によれば、過日、九大の学生運動の先輩が亡くなり、遺品を整理していたお連れあいから「こんなものがありました」と渡されたとのことであつた。

*写真のキャプションの文章、簡略化して記載していること、御了解ください



灰にコショウを混ぜ、こん棒、石、鉄棒などで攻撃する職制たち (1960-3-28 三川鉱)



暴力団をまじえて第二組合員たちが使った鎖ガマや丸太棒など (1960-3-28 三川支部)



会社の雇った暴力団に殺された久保清さんの合同葬 (1960-4-5 大牟田市民会館)



久保清さんの遺影を先頭に進む組合員の隊列 (1960-4-5 大牟田市駅前通り)

